

仮定法 定着ドリル（発展）

年 組 番 名前 _____

この紙のゴール：誤りを診断し、場面で形を選び、複数の正解のちがいを説明できる—採点者の目で仮定法を使う

1 エラー診療所—ある高校生の答案。誤りを直そう。 知識・技能

各3点

どこが変かを見つけて、正しい文に書き直す。理由が言えたら満点（裏の解答で確認）。

(1) 「お金がもう少しあれば、あのギターが買えるのに」のつもりで—

× If I would have enough money, I could buy that guitar.

(2) 「君みたいに英語が話せたらなあ」のつもりで—

× I wish I can speak English as well as you.

(3) 「去年もっと勉強していれば、受かったのに」のつもりで—

× If I studied harder last year, I would have passed the exam.

(4) 「先週の面接、君の助言がなかったら落ちていたよ」のつもりで—

× If it had not been for your advice, I would fail the interview last week.

2 使い分け判断—（ ）を埋めて、使った形に○。 思考・判断・表現

各3点

形の正しさではなく「その場面でどの形を選ぶか」の問題。話し手の判断が試される。

(1) あした雨が降ったら、ピクニックは中止にしよう。

If it () tomorrow, let's cancel the picnic.

使った形（○をつける）： ふつうの現在形 仮定法過去 were to

(2) かりに太陽が西から昇っても、私の答えは変わらない。

Even if the sun () in the west, my answer would not change.

使った形（○をつける）： ふつうの現在形 仮定法過去 were to

(3) 時間があれば手伝うんだけど（今日は無理そうだ）。

If I () time, I would help you.

使った形（○をつける）： ふつうの現在形 仮定法過去 were to

3 どちらも正解—ちがいを説明できるか。 思考・判断・表現

各3点

授業では：まずペアで「自分ならa・bどちらで書くか」→挙手→理由を1人ずつ。正解はひとつではない。

(1) あなたの助けがなかったら、私は成功していなかっただろう。

a Without your help, I would not have succeeded.

b If you had not helped me, I would not have succeeded.

どちらも正解。ちがいをひとこと：

(2) もし生まれ変わるなら、鳥になってみたい。

a If I were born again, I would like to be a bird.

b If I were to be born again, I would like to be a bird.

どちらも正解。ちがいをひとこと：

4 入試実戦の和文英訳。思考・判断・表現

各4点

(1) あの日、電車に乗り遅れていなかったら、今、彼女とは知り合っていないだろう。

ヒント: miss the train / know her now

(2) 英語がもっとうまく話せたらなあ、と思わない日は一日もない。

ヒント: not a day / wish

解答 3・4は一例。文として正しく意図が伝われば広く認めます

I (診断と修正)

(1)	If I had enough money, I could buy that guitar.	診断: if 節に would を入れない (最頻出の誤り)。距離の合図は過去形だけで出す。
(2)	I wish I could speak English as well as you.	診断: wish の後ろは仮定法 = can も過去形 could に下げる。
(3)	If I had studied harder last year, I would have passed the exam.	診断: 過去の事実と違う想像は had + 過去分詞まで下げる (仮定法過去では「今」の話になってしまう)。
(4)	If it had not been for your advice, I would have failed the interview last week.	診断: 帰結側も過去の話なら would have + 過去分詞。if 節だけ直して満足しないこと。

2 (形と理由)

(1)	rains (ふつうの現在形)	あしたの雨はふつうにありうる = 仮定法にしない。let's と自然につながる。
(2)	were to rise (were to)	「太陽が西から昇る」 = まず起こらないことの強調。修辭的な譲歩の定番。仮定法過去 rose も文法的には誤りではないが、ここは were to が定石。
(3)	had (仮定法過去)	今の事実と違う (= 時間がない)。話し手が「無理そうだ」と判断しているから仮定法。

3 (ちがいの説明例)

(1)	aは前置詞句で簡潔—スピーチの締めや礼状で強い。bは条件を文で明示—説明的で誤解がない。試験ではどちらも満点。「短く言うか、はっきり言うか」の選択。
(2)	どちらも正しい。were to を入れると「まず起こらない」が一段強くなる—話し手が現実からどれだけ距離を取るかの違いで、正誤の問題ではない。

4 (解答例)

(1)	If I had not missed that train, I would not know her now.	混合仮定法 (過去の条件 → 現在の帰結)。would not have known としない—「今」の話だから would not know。国公立二次で差がつく形。
(2)	Not a day passes when I do not wish I could speak English better.	難問。Every day I wish I could speak English better. でも満点—まず安全な形で確実に書けることが先。Not a day goes by that I do not ... も可。

